図画工作・美術科の指導

授業でこれだけは必ずやりたい《用具・素材、環境、学習過程編２０》

用具・素材

NO.	内　容	詳　細	確
1	鉛筆を使わせる。	鉛筆に慣れる。多様な線質の線を引くことができる。	
2	水彩、ポスターカラー等では、水入れの４（３）つの部屋すべてに水を入れる。水入れの水は７分目程度。	「洗う」「すすぐ」「つける」の使い分け。 水入れの水は多くても、少なくてもダメ。	
3	水彩、ポスターカラー等の水加減は子どもの知っている具体物で例える。	水をたくさん使って…スープ 水を少なめに使って…ケチャップ　ポタージュスープ 水加減が少な過ぎる…マヨネーズ	
4	パレットの大きな部屋 混色はグラデーションで（水彩絵の具） 絵の具を残さず混ぜきる（ポスターカラー）	水彩：様々な色でムラのある豊かな彩色 デザイン：ムラなく一色で彩色 使用後は、大きな部屋のみティッシュペーパーや雑巾で拭き取り、きれいにする。	
5	筆は、きれいに洗い、雑巾などで水気を拭き取る。	次に使うときに、色が混ざらないようにする。穂先を天井に向けて立てておくと、金具の中に絵の具の色がたまってしまうので注意する。	
6	版画用のローラーは一方向に転がす。 端や角はローラーを横や斜めにする。	前後関係なく転がすと左右のねじが外れてしまう。 ローラーを版木から落として下の紙を汚さない。	
7	版画インクの量は適量	よく練って、ジャミジャミに。多いと彫り跡に詰まる。 少ないとムラになる。	
8	画用紙の裏表を（手触りや切り口で）見極め、表を使う。	表は「防水のためのサイジングが施されている」「凹凸がある」「切り口にめくれがある」。裏面で描き込むとぼろぼろになる。	

環境

9	作品に画びょうを直接ささない。	作品が大切にされた環境。台紙や帯を付けて画びょうで留める。簡易額を用いる。	
10	机の上、床の掃除。	材料を大切にする心を育てる。床に落ちた材料を踏みながら活動することがないようにする。	
11	材料の残りをゴミ箱に捨てさせない。（材料箱の設置）	「また何かに使えるかもしれない。」「他の誰かが使うかもしれない。」材料を大切にする心を育てる。	

学習過程

12	題名を工夫する。	題材への興味関心が高まる。題材の魅力や付けたい力が明確になる。	
13	立体の授業の見本や示範、鑑賞は立体で示す。	立体として捉える。どの角度からも見ることができる。 質感、触感を味わう。	
14	教師の作品は、子どもと同じ用具、材料、大きさ、時間でつくったもの。	子どもの実態に合った作品。子どもと同じ条件でできるもの。つまずきを知る。	
15	（導入） 憧れや疑問を抱かせる教師作品の提示	知的好奇心の喚起。「おーっ」「わーっ」「おやっ？」驚きや疑問。「すごい！」でも「自分でもできそう」「もっとすごいものをつくるぞ」と意欲が高まる資料作品であること。課題や課題解決の方法を絞り込む資料。	
16	（導入） 先行する子どもの作品や表現の紹介。	子どもの作品（表現）を用いることで、子どもの実態や意識に近い課題が創出できる。	
17	（導入） 本時の課題解決のための方法を理解するための示範。	「あんなふうにやってみたい」という憧れ。「そうやればいいのか」という言葉で理解できない子どもの理解を援助する。	
18	（終末） 言葉だけでなく作品を指し示させ、表現された形や色、材料を感じ取らせる。	形や色、材料をじっくりと感じ取る。発言した子どもと聞いている子どもが、感じ取ったことを共有する。巧みな言葉で概念的な捉えにしない。	
19	（終末） 導入時（前時）の表現との比較によって本時の表現の高まり（変容）を実感させる。	導入時（前時）の表現は、写真やコピー、ＶＴＲで残す。比較によって変容が捉えやすくなる。形が消えてしまった途中の段階（過程）を価値付け、評価したい。	
20	（終末） 他の子どもにはないその子だけの表現を紹介し、価値付ける。	「誰か」や「何か」の真似ではない自分だけの表現の値打ちを実感する。「もっと美しいもの」「もっとおもしろいもの」を求め続ける意欲を高める。	